

## 目 次

コロラドの町で考えたこと .....	青木泰司 (1)
都市計画のすすめ —めざせアーバン・プランナー— .....	坪原紳二 (4)
新規受入図書案内 (1997年4月～1997年8月受入分) .....	(6)

## コロラドの町で考えたこと

青木泰司

### 1

We, Japanese people という表現は実に日本的な発想であって、アメリカ人はWe, Americans とは言わない。なぜなら日本は単一民族国家であるとされているのにたいして、合衆国は多種多様な人々から成っているからだ。このように説明されることがある。それは、まちがっていないだろう。だが、合衆国にも、問題によっては、かなり画一化された国民感情が存在することもまた確かだ。われわれが日本でみかけるアメリカ人、いわば海外経験のある人はともかく、おそらく生涯合衆国の外へ出たことのないアメリカ人にとって、日本はどのように受け取られているか、とりわけ、さらに微妙な問題として、彼らにとって「ヒロシマ」とは何を意味するのか。これは、ずっと以前から私にとって知りたい問題のひとつであった。

1995年の春HOWという英語教師の日米交流団体からアメリカの学校を視察する旅行に参加しないかという誘いがあった。この旅行の過程で、ヒロシマに関連して、一般のアメリカ人の気持の一端を知ったことは意義が大きかった。HOWのグループのなかで私が「派遣された」のは、デンバーから北へむかってクルマで2時間、人口5千人ほどのLovela

ndという町だった。その町の高校の先生の家に数日滞在することになった。

その先生が勤務しておられる高校を案内してもらい、いくつか授業をみる機会があった。そあるクラスで、たまたま教室の片隅に置いてあったテキストをみて驚いた。テキストは二次大戦のことを説明してあった。私の関心をひいたのは、パールハーバーについての記述とヒロシマについての説明とのきわだったコントラストだった。パールハーバーの被害については、被害の実数が、死者・負傷者ともに1の位にいたるまで明記され、非戦闘員のくわしい分類もされていた。それに反して、ヒロシマの記述では単に「8万人」が死んだ、という記述ですまされていた。

そこには、広島における被害者のほとんどが非戦闘員で、女・子供・老人が含まれていたという説明がまったく欠けていた。アメリカには日本の文部省にあたる役所はなく、教科書の選択はその学校にまかされている。私が見た教科書によって合衆国全体を押し量ることはできない。だが、記述の不公正さは、多くのアメリカ市民が「ヒロシマ」にたいして抱いているイメージに結びつくものではないかと感じた。

その先生は高校で教えながら、家庭では二児の母であり、妻であった。当然猛烈に忙しい日々を送っていた。私はむしろ、彼女のご主人とよく話をした。なにかの機会に、ヒロシマが話題になった。彼は、広島への原爆投下のことで日本人のあいだに resentment が

あるかときいた。

彼が聞きたがったのは、アメリカにたいする日本人の感情という点だったと思われる。そこで私は、「誰が」という問題よりむしろ、けっして二度と起こってほしくないという気持ちが強いと答えた。彼は、多少言い訳じみた口調で、あの原爆投下がなかったら、何万という兵隊の犠牲がでただろう、という一般のアメリカ人が信じている見解を披露した。

実は、原爆投下の真の理由はそんな単純なものではなく、もっと政治的な意図が絡んでいたこと、また開発された新兵器が人類にどんな被害を知るための実験でもあったことは、最近までのさまざまな調査・研究でわかっている。だがそのときは、世話になっているホストにたいしてそんな討議はしなかった。たんに、「貴方の言っていることはたんなる想定だ。しかし現実に肉親や友人を原爆によって失った人々にたいして、そんな想定を話しても、なんの慰めにもならないでしょう。」と答えた。彼はだまっていた。だがこのやりとりは、まったく平静におこなわれた。

多くのアメリカ人はヒロシマについて、触れられたくない話題という気持ちをもっている。96年にスミソニアン博物館は原爆をテーマとしたイベントを計画して、そのなかにヒロシマから原爆遺品の展示を含めようとした。だが在郷軍人会などからの反対に会って、ついに展示を断念した。同じワシントンDCにあるアメリカン大学は日本から送られてきた遺品の展示を引き受けた。だが一般市民の関心は低かったようだ。

## 2

多くのアメリカ人にとってヒロシマは、直視することがむずかしい問題であるようだ。他方日本人もまた、大部分、戦時中に近隣諸国にたいして犯した残虐行為を直視できない。従軍慰安婦の問題ですら、正面きって解決に取り組もうとしない政府をみてもそのことは明らかだ。だがアジアの諸国では、日本の植民地からの解放のシンボルとして原爆をみる。

太平洋戦争で約2000万人のアジア人（日本人以外）が死んだといわれている。15年戦争という長期にわたって日本の軍国主義と戦っ

てきた中国の人達が、「広島への原爆投下は、日本の軍国主義を敗北され、中国を解放した正義の爆弾」という認識をもっているとしても、その立場からすれば当然なのかもしれない。多くのひとは、おそらく実際のヒロシマで生じた惨劇についてほとんど知らないからだと思いたい。

これらの国の人たちにヒロシマのことを伝えるのは非常に意義があるが、同時に困難をとまなう。「ヒロシマで多くの女・子供が死んだというが、我々の国ではその何倍もの犠牲者がでているのだ」と反論されるだろう。これらの国の人々にとって、ヒロシマは「加害者」としての日本軍国主義の結末という意味をもっている。

「われわれ日本人」という発想のもとに「被害者」の立場だけを訴えるのでは、国際的な支持を受けられない。日本人のなかには「国際的な支持」といえば、主としてアメリカの意向を気にする事とっている人も多い。反面、アジアの近隣諸国が、日本をどう見ているかをあまり深くは考えない傾向がみられる。かつての「加害者」としての日本がアジア諸国でどのような行為をおこなったのか。この問題に直視することなしに、平和や核兵器廃絶を語ることはできないだろう。

## 3

もし国家が、生身の人間に似て、自意識をもつものであるとすれば、やはり生身の人間と同じく自らの「加害」行為については忘れっぽいが、他方「被害者」意識は拡大されていくだろう。多くの場合、国家的な「被害者意識」は新たな紛争を引き起こす。

1930年代のドイツ人が抱いた被害者意識はナチに利用された。I大戦後、過酷な賠償金、悪性インフレのなかで新たに世界恐慌のあおりを食ったドイツ経済はどん底の状態に陥った。これらはすべて外部から押しつけられたワイマール体制のせいだとするナチの宣伝は、まさに「被害者意識」に訴えたものといえる。ナチス・ドイツに迫害され何百万人も虐殺されたユダヤ人は、戦後自らの国家・イスラエルを創った。だが今度は、イスラエル建国によって多くのパレスチナ人が土地からも家

からも追われた。絶望的な状況のなかでテロの頻発、またパレスチナ人を支援するアラブ諸国に囲まれているという一触即発状態に対応し、イスラエルは「要塞国家」となった。

フランスの被害者意識は、2年前のムルロアに端的に現れた。世界中から轟々たる非難をあびながら、シラク大統領が水爆実験の継続に固執した理由は、「わが国は二度にわたって外部から侵略された」という被害者としての立場にもとづいている。

「被害者意識」が、新たに他者にたいする「加害」をもたらしている事実は、さまざまな社会的事例としてみるができる。合衆国では最近Affirmative Action Policyにたいする反発が増大している。今年になってついにカリフォルニア州がminoritiesにたいする優遇策を反故にしたことは、白人層の「被害者意識」に応えるものだった。伝統的なKKK団の黒人迫害にしても、「このままいけば、今にアメリカは黒人に乗っ取られる」という貧民白人層の「被害者意識」に訴えたものである。

われわれは生物として自己保存本能をもっている以上、自分の身に向けられる攻撃にたいしては、最大限意識して、ふたたび同じような目に会わないように被害者意識をもつ。これはしごく当然である。その半面、われわれはそれぞれが個体である限り、他人の痛みを直接感じ取ることはできない。だが人間としては「その攻撃が自分に向けられたらどうなるか」という想像によって、他人の痛みを推し量ることはできる。この想像力は大いに教育の産物であろう。人によっては、その種の想像力が欠如している。

子供たちの間でのいじめの問題は、この被害者意識と関連しているのではないか。いじめ事件が発生するたびに、「いじめられる側に問題があるのでは」という指摘がおこなわれるが、実はいじめるほうも多くは被害者意識があるのではないだろうか。子供たちは被害も受けている場合にはそれを痛切に意識するが、逆に加害者に回るとき、「加害者だ」という意識が希薄な場合が多いようだ。

立場を異にすることで意識レベルが異なってくる例は、人々の社会関係のなかで随所に

みられる。素人同士の金の貸し借りにおいて、しばしば借り手は金を借りたことを忘れるが、貸し手は忘れない。借り手は、金を返さないことによって事実上一種の加害者となるが、その自覚は薄い。

環境問題ではわれわれは一億総加害者である。だがその意識はない。「マイカー」に乗って日曜ドライブに出掛け、車内ではエアコンやBGMで快適さと便宜を追求しながら、排気ガスをまきちらしながら疾走している時、はたして何人のドライバーが環境にたいする「加害者」意識をもつだろうか。

われわれは、いつでも加害者になりうる。また事実かつてそうであったという自覚はとても重要だと思う。平和の問題や、環境問題は、そのような自己にたいする厳しい問い掛けを伴わない場合には、たんなる掛け声におわるだろう。

#### 4

これまで、コロラド滞在中に考えたことに端を発して、ヒロシマについて世界の人達にどう話すべきかをみてきた。その過程で「加害者としての認識」を問題にした。だが誤解のないようにしておくが、けっして、「ヒロシマの被害について語るな」と主張しているのではない。言いたいのはその逆である。原爆の悲惨さを訴えつづける被爆者の運動が重要なことは言うまでもない。同時に、草の根運動として、たとえば北浦葉子さんがつづけてこられた広島記録ファイルを見せながら歩く運動は貴重だ。このような努力には頭がさがる。

まだまだ世界の人々は、原爆の恐ろしさを十分知ってはいない。核兵器保持政策は、このような人々の無知に立脚しているともいえる。この点では、「被害者意識」は日本の外には存在しない。核に頼ることを受け入れている人々は、一度核戦争が起きると、敵も味方も、無差別に壊滅してしまうことを十分には考えないのではないか。だからこそ核には「抑止力」があるのだ、という議論もある。たしかに核兵器には抑止力はあるだろう。だがそれは国際緊張を強めこそすれ、けっして和らげることのない「抑止力」である。

現在の日本はさまざまな顔をもっている。戦後、平和憲法のもとで、少なくとも大っぴらな武器輸出はしなかった。唯一の被爆国として、核をつくらない・保有しない・持ち込まないという「非核3原則」を標榜してきた。だが、他方で、この3原則は形骸化し、アメリカの原子力空母の入港にさいして、数万の見物人が押しかける。湾岸戦争のとき、「戦争を金で買う経済大国」いう評判をとった。

「ノー・モア・ヒロシマ」を世界に訴えるためにも、われわれは過去の日本の加害者行為から目をそらすべきではない。国際理解とは自分自身の理解から始まる。このことは、「ヒロシマ」の問題にも言える。

(97年9月)

## 都市計画のすすめ

—めざせアーバン・プランナー—

坪原 紳二

### 1. 都市計画で飯は食えるか

本年度より生活科学科内に居住環境コースが設置された。住居と都市計画の2分野を大きな柱としており、私は後者を担当している。

前期のオリエンテーションの際、同コース第1期生を対象に「居住環境コースに期待すること」と題するアンケートを取ってみた。講義内容に学生のニーズを反映させたいとの意図であったが、結果はいささか落胆させられるものだった。というのは、圧倒的に住居(インテリアも含め)や建築についての学習希望が多く、都市計画、まちづくりについて特に学びたいとする者は、10名にも満たなかったからである。これでは、学生のニーズに合わせてカリキュラムを作るとなると、私は失業となってしまふ。

しかし冷静に考えれば、こうした結果は十分予想されるものだった。なぜなら、そもそも都市計画という学問領域が、一般にはまだまだなじみが無いからである。「都市」も「計画」も、個々別々には意味は分かる。しかしこの二つがくっついて「都市計画」とな

ると、分かりそうで分からない。専門を聞かれて「都市計画」と答えると、怪訝な顔をされることがしばしばある。「道路の位置を決めたり、建物の規制を決めたり…」と説明しつつ、むなしさを感じてしまう。一つの学問領域の全体像を、そんなに簡単に説明できるわけがない。

ただこうした問題は、すでに半期以上にわたり私の講義を聞かされてきた学生たち(居住コース以外、2年生も含め)には、ある程度解消されつつあるに違いない。都市計画とはどんな学問なのか、おぼろげながら分かってきたはずである。(「とんでもない」といった声が聞こえてきそうだが。)

しかしそれでもやはり大方は、都市計画はほどほどに、住居や建築をきちんと学びたいと考えているのではないだろうか。こう勘ぐらざるを得ないのは、なじみの無さとはまた別の、現実的理由があるからである。それは都市計画には、職業的展望が無いということである。住居なら、住宅産業、設計事務所、インテリア・コーディネーターといった華やかな職場がすぐ浮かぶ。しかし都市計画を学んで、果たして仕事に結びつくのか。たいていの人は疑問に感じるだろう。事実、私は工学部の都市計画コースに所属していたが、卒業生の就職先は実にバラエティに富んでいた。特に当時はバブルの絶頂期で、銀行や証券会社に就職する者がやけに多く、その他テレビ局、出版社なども就職先になっていた。

では、本当に都市計画が活かせる職場は無いのか? とんでもない。自治体しかり。建設会社しかり。さらに、都市計画を正面に掲げる職業だってある。それは、都市計画コンサルタント(以下「コンサル」)である。

私はアルバイト時代も含めると、通算約4年にわたりこのコンサルの業務に携わってきた。そこで筆者の体験を例にしつつ、コンサルの仕事とはどういうものなのかを紹介し、都市計画に対する学習意欲をさらに一層かきたてたいと思う。

### 2. 吉祥寺時代—地域開発

私が最初にコンサル事務所に足を踏み入れたのは、大学院の修士時代であった。場所は

実家のある東京都武蔵野市の、吉祥寺。当時“近鉄裏”と恐れられていた、風俗営業街の外れにあるマンションの一室を事務所にしていました。所長一人で常勤スタッフはおらず、私その他アルバイト2名程を雇い、またときには奥さんをこき使っていた。

やっていたのは主に自治体から委託を受けての、地域開発計画の立案。この、自治体から計画立案の依頼を受け、報告書を作成してお金を頂戴するというのが、コンサルの基本的な仕事のパターンである。

ここはリゾート開発などの地域開発が対象だから、純粋に都市計画だけでなく、産業政策をも含む計画の立案作業を行っていたわけである。鹿児島島の甑（こしき）島に出張の際、カバン持ちで同行させてもらったことがあるが、所長さんは島の村が特産品として開発した珍味を試食しながら、役場職員にもっともらしいアドバイスをしていた。ちなみにこの人は、建築科出身の一級建築士である。

事務所では私は、図面を清書したり別荘地の模型を作っていた記憶がある。

### 3. 中野時代－総合計画

修士を卒業した後1年ほど、東京の中野のコンサルで働いていた。所員は私も含め6人で、中堅3人、若手3人という構成だった。

ここは自治体の土地利用計画、景観計画などの都市計画関連分野の他、総合計画の立案業務も手懸けていた。総合計画とは、自治体の今後10年、20年といった長期にわたる諸施策の、基本的な方針を示した計画書である。今日ではどの自治体も、名前はさまざまであるが、この総合計画を作っている。しかしすべて自前で作ることは稀で、たいていはコンサルに委託し、お金を払って計画づくりを手伝ってもらうのである。

総合計画は自治体の施策の総合的な計画書であるから、都市計画はもちろん、それ以外の、福祉、産業、教育・文化などの関する計画も含まれている。しかし都市計画コンサルタントは、これらいわば専門外の分野の計画も作ってしまう。中野のコンサルでも、建築科出身の中堅2人が、高齢者福祉に関する施策などをねじり鉢巻きしながら書いていた。

(コンサルは通常、5・6本の計画を同時に作っていくため結構忙しいのである。)

こうしてコンサルが書いた計画は、もちろんそのまま確定となるわけではない。それを役所内の関係各課に見せ、一般市民や議員も入っている審議会に諮り、出された意見を基に修正、再度検討してもらおうといったことを繰り返して、最終案へと持っていく。この一連の調整作業のスケジュールづくり、会議の運営も、コンサルの重要な業務である。

中野のコンサルでは私は、図面づくりやアンケートの分析の他、上のような会議のテープをワープロで起こしまとめ、次回会議用の資料を作ることを、相当やらされた。事務所で計画案を作ってそれを提出して終わりというのではない。役所と事務所の間を何度も往復しつつ、その案を最終案まで持っていく過程の進行管理をする役割も、担っているのである。

### 4. 長野時代－住民参加

中野のコンサルを辞め神戸で大学院に入り、震災の少し前、今度は何を考えたか、長野のコンサルに就職した。所員は私と所長の2人。仕事は主に、長野市周辺町村の土地利用計画や総合計画の作成で、三重短に来るまでここで働いていた。

ここでもやはり、役場と連絡調整を行いつつ計画づくりを進めていたが、東京のように電車で行き来するというわけにはもちろんいかない。バスはタクシーのような値段だし本数も少ないから、結局所長運転の車で通うことになる。30分～1時間を要したが、さすが山国だけあって車窓からの眺めはすばらしかった。遠くに雪をかぶった北アルプスの山並みが見えたりして、ほとんど観光ドライブをしているような気分だった。(運転している所長さんは狭く曲がりくねった山道でたいへんだったと思うが)。

しかし眺めは良いが、長野市周辺というのはいわゆる中山間地域で、過疎化・高齢化が著しく進んでいる。こうした地域の計画を作るには農村の問題、あるいは山の問題についての知識も当然必要となってくる。私にとってはほとんど未知の分野だったが、とにかく

所員は2人しかいないので、本を読みあさりながら計画書を書いていた。

このコンサルでは特に、住民参加を積極的に取り入れつつ、計画づくりを行っていた。土地利用計画を作る際には集落ごとに集会をもち、住民から意見を聴き、それを計画に反映されるよう努めた。この集会の中身の企画、そして当日の司会進行が、われわれの腕の見せ所であった（これも都市計画の重要な知識である）。参加してくる住民は、ほとんどが人前で一度もしゃべったことの無いような高齢者である。こういう人たちにいかにたくさんしゃべらせるかに、頭をひねるわけである。こうした経験があったので、素人相手に専門の話をするには自信があったのだが、三重短で相当その自信はぐらついてしまった。

それはそうと、この実績が買われて計画立案とは全く関係なく、生協の組合員相手の環境学習について学ぶ学習会（ワークショップ）の企画運営を委託されたこともあった。

#### 5. めざせアーバン・プランナー

以上、都市計画コンサルタントの仕事の中身を、私の体験を例に紹介してきた。確かに一つの建物を作るという行為は、創造的である。しかし計画づくりを通して地域を作っていく営みも、劣らず創造的な行為ではないか。しかもそれは、自治体職員はもとより、地域住民とも相携えての協働作業なのである。特にこれからは、まちづくりに女性の視点を反映させていくことが、非常に大切になってくる。

ただ今まで見てきたように、アーバン・プランナー（urban planner, アメリカでは都市計画業務に携わる人をこう呼ぶ）になるには、都市計画に関する知識を核に、実に幅広い知識が要求される。しかしそもそも都市計画というものを理解するには、工学的・法律的知識のみならず、政治学、経済学、あるいは社会学などに関する知識が必要なのである。なぜなら都市の物的環境を生み出している行為の背景には、社会的・政治的・経済的事実が原因として必ず存在しているからである。

都市計画を学ぼう。そのためにも、学際的（雑学的？）知識を身につけよう。そして、めざせアーバン・プランナー。

## 新規受入図書案内

(1997.4~1997.8)

総記 (000)

### 〈岩波新書〉

新宗教の風土	小沢 浩
ジャーナリズムの思想	原 寿雄
術語集	中村 雄二郎
日本社会の歴史 上・下	網野 善彦
日本の誕生	吉田 孝
日本近代史学事始め	大久保 利謙
中東現代史	藤村 信
南原繁	加藤 節
高野長英	佐藤 昌介
日本の地名	谷川 健一
イギリス式人生	黒岩 徹
転換期の国際政治	武者小路 公秀
マックス・ウェーバー入門	山之内 靖
教育改革	藤田 英典
新・コンピュータと教育	佐伯 胖
ハッブル望遠鏡が見た宇宙	野本 陽代
	R. ウィリアムズ
現代の感染症	相川 正道, 永倉 貢一
がんと人間	杉村 隆他著
都市開発を考える	大野 輝之
	レイコ・ハベ・エバンス
日本の美林	井原 俊一
日本語はおもしろい	柴田 武
短歌パラダイス	小林 恭二
陶淵明	一海 知義
ゼロエミッションと日本経済	三橋 規宏
日本銀行	川北 隆雄
胃は悩んでいる	伊藤 漸
公共事業はどうするか	五十嵐 敬喜
	小川 明雄
〈岩波ブックレット〉	
近現代史をどう見るか	中村 政則
日本占領下香港で何をしたか	和久田 幸助
香港回収	朱 建栄
大蔵省改革	石澤 靖治
明治の憲法	江村 栄一

日本型経済システムを超えて 堤 清二  
 佐和 隆光  
 官僚天下り白書 堤 和馬  
 “子連れ出勤”を考へる アグネス・チャン  
 原 ひろ子  
 定年後の人生 佐高 信, 吉武 輝子  
 あゝ「青空」をふたたび 丸木 政臣  
 大阪の緑を考へる 中山 徹  
 市民インターネット入門 安田 幸弘  
 破壊される熱帯林 地球の環境と開発を考へる会  
 障害を輝きにかへて 袴塚 里絵  
 産む／産まないを悩むとき 丸本 百合子  
 山本 勝美  
 人に聞けないUNIXの使い方  
 アスキー書籍編集部編  
 経営科学とコンピュータ 山下 智志  
 ジャーナリズムと法 奥平 康弘

### 哲 学 (100)

オランダの安楽死政策 宮野 彬  
 発達心理学を愉しむ 宮原 英種, 宮原 和子  
 ニコマス倫理学 上・下 アリストテレス  
 道徳形而上学原論 カント  
 心理学事典 平凡社編  
 印象測定心理学 神宮 英夫  
 緊急時の情報処理 池田 謙一  
 愛と性と母権利 エーリッヒ・フロム  
 現代社会の深層 馬場 謙一他著  
 カウンセリング演習 福島 脩美  
 空海 空海  
 メディアに学ぶ心理学 中島 義明編

### 歴 史 (200)

江戸っ子 西山 松之助  
 三省堂世界歴史地図 ビエール・ヴィダール＝ナケ  
 アローマ コンスタンス・クラッセン  
 ティヴィッド・ハウ  
 日本史史科 5 現代 歴史学研究会編  
 アジア・太平洋戦争 森 武麿  
 日本古代の宮都と木簡 佐藤 信  
 図解・江戸城をよむ 深井 雅海

日本現代史読本 原田 勝正  
 カメラがとらえた激動の半世紀 中日新聞本社編  
 カメラがとらえた中部の半世紀 中日新聞本社編  
 徳川慶喜家の子ども部屋 神原 喜佐子  
 自由への長い道 上・下 ネルソン・マンデラ  
 身近な地理学 福原 正弘

### 社会科学 (300)

戦争で語りあった戦争責任 久保田 貢  
 現地から伝えるスウェーデンの高齢者ケア  
 訓覇 法子  
 教育「大変な時代」 新堀 通也  
 仮設実験授業の考え方 板倉 聖宣  
 家庭科教育法 仙波 千代他著  
 政策科学の基礎 宮川 公男  
 ドイツの都市と生活文化 小塩 節  
 住まなきわからないドイツ 熊谷 徹  
 〈自由-社会〉主義の政治学 富田 宏治  
 神谷 章生  
 西洋政治思想史 藤原 保信・飯島 昇蔵編  
 新時代の子どもの権利 喜多 明人  
 国家を超える視角 太田 一男  
 テキストブック現代の人権 川人 博編著  
 人にやさしい街づくり 山田 昭義  
 星野 広美編  
 立法の平易化 松尾 浩也, 塩野 宏編  
 法理学講義 田中 成明  
 権利・価値・共同体 長谷川 晃  
 合理的選択と契約 小松 公  
 基本的人権の事件簿 棟居 快行他著  
 資料で考へる憲法 山中 永之佑編著  
 新・あたらしい憲法のはなし 森 英樹  
 倉持 孝司編  
 日本国憲法50年と私 杉原 泰雄  
 樋口 陽一編  
 資料で考へる憲法 山中 永之佑編著  
 基本的人権の事件簿 棟居 快行他著  
 国民代表論 山本 悦夫  
 憲法判例 阿部 照哉他著  
 いまこそ読もう日本国憲法 青年法律家協会編  
 現代憲法講義 浦部 法穂他著  
 憲法 大須賀 明編  
 伊藤真の憲法入門 伊藤 真

- 新憲法教室 阿部 照哉他著  
 憲法から斬る 佐高 信  
 人工生殖の法律学 石井 美智子  
 家族と法律 中川 淳  
 新家族法入門 中川 淳  
 遺産分割 松原 正明  
 昭和の刑事政策 土屋 眞一編  
 刑事政策学入門 加藤 久雄  
 刑事訴訟法 村井 敏邦  
 捜査法 平良木 登規男  
 蛇頭(スネークヘッド) 莫 邦富  
 はじめよう経済学のためのMathematica 浅利 一郎他著  
 OR入門 牧野 都治  
 はじめての簿記 永之 則雄  
 国際金融のしくみ 秦 忠夫, 本田 敬吉  
 国際金融の解明 菊地 悠二, 浜田 宏一  
 金融システム 酒井 良清, 鹿野 嘉昭  
 日本の金融と市場メカニズム 清水 啓典  
 新統計概論 森田 優三  
 新しい家族社会学 森岡 清美, 望月 嵩共  
 シミュレーション世界の社会心理学 広瀬 幸雄  
 ヨーロッパ人の奇妙なしぐさ ピーター・コレット  
 共働き家族 袖井 孝子他著  
 現代の結婚と夫婦関係 神原 文子  
 現代家族の社会学 石川 実  
 社会調査のためのデータ分析入門 土田 昭司  
 「社会」を読み解く技法 北澤 毅  
 古賀 正義編  
 比較福祉国家論 岡沢 憲美, 宮本 太郎  
 女と法とジェッター 上田 純子他著  
 女性がつくる家族 女性学研究会編  
 フェミニズム問題の転換 金井 淑子  
 女性福祉を学ぶ 橋本 宏子  
 女性の自立とライフ・サイクル 森 圭一  
 昭和の女性一日一史 月守 晋  
 貧困・不平等と社会福祉 庄司 洋子他著  
 女性犯罪 中谷 瑾子  
 病む人・癒せぬ人 永井 明  
 情報化時代の新しい福祉 社会福祉・医療事業団編  
 福祉革命 石井 富蔵  
 社会福祉の法律入門 佐藤 進, 児島 美都子編  
 心の復活 堀田 力  
 基礎から学ぶボランティアの理論と実際 巡 静一, 早瀬 昇編著  
 社会福祉における市民参加 社会保障研究所編  
 福祉事務所 山本 雄司  
 長寿社会における高齢期の生活経営 浅田 幸子共著  
 ケアリーダー読本 全国社会福祉協議会編  
 老いゆくところとからだ 大久保 貞義  
 唯でもできる寝たきりおこし大作戦 兵庫県社会福祉事業団編  
 福祉用具の見方と活用の実際 山田 健司  
 理論と実践リハビリテーション介護 住居 広士編著  
 わたしは盲導犬イエラ 日々野 イエラ  
 医療福祉への道 江草 安彦  
 大きな学力 寺内 義和  
 消える授業残る授業 小西 正雄  
 子どもの学校生活の相談指導 安藤 春彦  
 土橋 圭子編  
 子どもたちの警告 富田 和巳  
 時代と向き合う教育学 竹中 暉雄他著  
 資料でみる教育学 篠田 弘編著  
 学校で起こっていること 「進研ゼミ」中学講座編  
 教師がとりくむ不登校 菅 佐和子  
 子どものためのストレス・マネジメント教育 竹中 晃二編著  
 子育て, 教育とも育ち 折出 健二  
 現在(いま)を生きる中・高生 尾木 直樹  
 心の視点 横湯 園子, 高垣 忠一郎編  
 カウンセラーが語るころの教育の進め方 諸富 祥彦  
 チャータースクール ジョー・ネイサン  
 教員になりたい人の本 教育研究会編  
 すぐに役立つ野外活動ハンドブック 石田 泰昭編著  
 評価言の人間化 山下 政俊  
 教育方法学 佐藤 学  
 子どもが本気になる道徳授業 深沢 久編著  
 環境問題と道徳教育 塚野 征編著  
 新しい家庭科の授業設計 井上 照子編著  
 家庭科授業構成研究 佐藤 園  
 男女が学ぶ家庭科の授業 家庭科教育研究者連盟編  
 家庭生活・被服・保育 河野 公子編著  
 発達危機と自我 生路 智子, 白石 正久編  
 アドラー博士の子どものEQの高め方 星 一郎  
 ファッション文化 鍛島 康子  
 肉食文化と魚食文化 長崎 福三



自然科学 (400)

- 複雑系 M・ミッチェル・ワールドロップ  
 わかりやすい意思決定論入門 木下 栄蔵  
 化学構造式 丸田 銓二郎  
 水の不思議 松井 健一  
 訪ねてみたい地図測量史跡 山岡 光治  
 バイオテクノロジー・ノート 山口 彦之  
 Oh!生きもの マーロン・ホーランド  
 パート・ドッドソン  
 細胞の科学 太田 次郎  
 DNA農業 岡田 吉美  
 DNA伝説 ドロシー・ネルキン  
 M・スーザン・リンディ  
 ゲノムを読む 松原 謙一, 中村 桂子  
 行動を操る遺伝子たち 山元 大輔  
 研究テーマ別動物培養細胞マニュアル  
 瀬野 惇二他著  
 医療科学入門 的場 恒孝編  
 人間性の医学 堀田 知光, 太田 美智男編  
 脳死と臓器移植 町野 朔, 秋葉 悦子編  
 安楽死・尊厳死・末期医療 町野 朔  
 活性酸素とシグナル伝達 井上 正康編  
 味の秘密をさぐる 渡辺 正, 桐村 光太郎編  
 ヒトのからだをめぐる12章 保志 宏  
 日本人の体脂肪と筋肉分布 安部 孝, 福永 哲夫  
 からだの営みと健康 佐々木 胤則, 仲井 邦彦  
 足は偉大だ 石塚 忠雄  
 ザ・ストーカー 春日 武彦  
 育児にかかわる人のための小児栄養学  
 山口 規容子, 水野 清子  
 「食べ合わせ」の栄養学早わかりブック  
 白鳥 早奈英  
 大学病院ってなんだ 毎日新聞科学部  
 原始人健康学 藤田 紘一郎  
 食とからだのエコロジー 島田 彰夫  
 臨床栄養管理 細谷 憲政, 中村 丁次編著

- 在庫管理の実際 吉川 英夫  
 大型プロジェクトの評価と課題  
 アルマンド モンタナーソ他編著  
 パブリックアートが街を語る 杉村 荘吉  
 循環都市へのこころみ  
 ソーラーシステム研究グループ  
 環境問題を哲学する 関西唯物論研究会編  
 大学における廃棄物処理の手引 文部省編  
 都市と住まい 西山 卯三  
 大学の空間 東京大学工学部建築計画室編  
 日本紡績業の中米進出 田中 高  
 インテリア繊維製品 軍司 敏博, 平井 郁子共著  
 生活設計と家庭科教育  
 堀田 剛吉, 杉原 利治編著  
 衣生活論 藤原 康晴他著  
 現代被服学概論 稲垣 寛他著  
 服装造形のためのデザイン 木曾山 かね  
 楽しい押し花づくり 柳川 昌子  
 小さな花の押し花 大沢 節子  
 「食生活指針」の比較検討 豊川 裕之  
 パーフェクトおかず 日本放送出版協会編  
 ビストロスマップ完全レシピ フジテレビ出版  
 メニューBook365日 保健同人社編  
 今夜のおかずカード1000 主婦の友社編  
 調理素材事典 高木 節子, 加田 静子編

産 業 (600)

- 地域とビジネス 松原 悦夫編  
 あそび環境のデザイン 仙田 満  
 里山の自然 田端 英雄編著  
 現在商業政策論 田中 由多加編著  
 貿易用語辞典 石田 貞夫編  
 貿易がわかる事典 森井 清  
 分けよう人と車を 脱クルマ・フォーラム編

芸 術 (700)

- 和英・英和タイトル情報辞典 小学館編  
 工芸と琳派感覚の展開 集英社編  
 抱一と江戸琳派 集英社編

ハリウッド大家族 広瀬 隆  
 からだの「仕組み」のサイエンス  
 宮下 充正, 加賀谷 淳子編著  
 体力を考える 宮下 充正  
 運動と栄養 栄養学レビュー編集委員会編  
 スポーツ・運動と健康 金谷 秀秋, 神林 勲  
 ウォーキング研究 江橋 慎四郎  
 最後の夏 山際 淳司  
 自由と冒険のフェアウェイ 山際 淳司  
 タイガー・ウッズ テイム・ロザフォート  
 動体姿勢 松井 章圭, 山根 悟

語学(800)

学研漢和大辞典 藤堂 明保編  
 日中・中日辞典 王 萍他編  
 日中辞典 北京・对外経済貿易大学編  
 日米慣用表現辞典 ケリー・伊藤  
 翻訳の方法 川本 皓嗣, 井上 健編  
 ひとり歩きのまんが英会話 日本交通公社編  
 英語でわかるドイツ語入門 福田 幸夫  
 独検合格らくらく30日 飯嶋 一泰, 清水 朗編著  
 独和中辞典 菊池 慎吾, 鐵野 善資編

文学(900)

文人悪食 嵐山 光三郎  
 和菓子屋の息子 小林 信彦  
 日本歌語事典 佐々木 幸綱他編  
 わたしはトメ, 19歳 中田 光彦  
 ストックホルムの密使 佐々木 謙  
 恋 連城 三紀彦  
 挑む女 群 よう子  
 幸福御礼 林 真理子  
 プリズンの満月 吉村 昭  
 白球残映 赤瀬川 隼  
 笑い姫 皆川 博子  
 崇徳伝説殺人事件 内田 康夫  
 三たびの海峡 帚木 蓬生  
 百日紅の咲かない夏 三浦 哲郎  
 臓器農場 帚木 蓬生  
 断崖, その冬の 林 真理子  
 怪談 林 真理子

白鳥 村上 龍  
 フルハウス 柳 美里  
 結婚詐欺師 乃南 アサ  
 罪深い姫のおとぎ話 松本 侑子  
 Shall we ダンス? 周防 正行  
 不機嫌な果実 林 真理子  
 胸の香り 宮本 輝  
 少年H 上・下 妹尾 河童  
 鷺の驕り 服部 真澄  
 人質カノン 宮部 みゆき  
 ニュートンの林檎 上・下 辻 仁成  
 冬の炎 上・下 高橋 治  
 水に似た感情 中島 らも  
 壁の目 森村 誠一  
 水鳥の関 上・下 平岩 弓枝  
 聖戦ヴァンデ 上・下 藤本 ひとみ  
 失楽園 上・下 渡辺 淳一  
 回想電車 赤川 次郎  
 スキップ 北村 薫  
 八月の獲物 森 純  
 寝たふりしている男たち 内館 牧子  
 中国行きのスロウ・ボート 村上 春樹  
 同級生 東野 圭吾  
 パラレルワールド・ラブストーリー 東野 圭吾  
 名探偵の掟(おきて) 東野 圭吾  
 スナーク狩り 宮部 みゆき  
 ベルリン飛行指令 佐々木 謙  
 霧越邸殺人事件 綾辻 行人  
 本の運命 井上 ひさし  
 生きものたちの部屋 宮本 輝  
 アマニタ・パンセリナ 中島 らも  
 事故調査 柳田 邦男  
 アンダーグラウンド 村上 春樹  
 逃(Tao) 合田 彩  
 シンプル・サイモン ライン・ダグラス・ピアソ  
 ロスト・ワールド 上・下 マイクル・クライトン  
 キャリアーズ 上・下 パトリッチ・リンチ  
 ランゴリアーズ スティーヴン・キング  
 二つの約束 上・下 グニエル・スティール  
 処刑室 ジョン・グリシャム  
 マディソン郡の風に吹かれて  
 ロバート・ジェームズ・ウォラー  
 カードミステリー ヨースタイン・ゴルデル  
 心のおもむくままに スザンナ・タマーロ  
 ぼくはこんな本を読んできた 立花 隆